

2020年1月NHK近畿地方放送番組審議会

1月のNHK近畿地方放送番組審議会は、15日(水)、NHK大阪放送局において、8人の委員が出席して開かれた。会議では、事前に視聴してもらった、NHKキャンペーン「災害列島 生きるスキル」「巨大地震 あなたの町の“地域リスク”」を含め、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、2月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	篠 雅 廣	(大阪市立美術館 館長)
副委員長	帯 野 久 美 子	(関西経済同友会 常任幹事)
委員	黒 木 麻 実	(公益社団法人 全国消費生活相談員協会 関西支部副支部長)
	小 林 祐 梨 子	(スポーツコメンテーター)
	佐 伯 順 子	(同志社大学社会学部 教授)
	鈴 木 元 子	(杉本や編集処 編集者)
	矢 崎 和 彦	((株)フェリシモ 代表取締役社長)
	安 井 良 則	(大阪府済生会中津病院 臨床教育部部長 兼 感染管理室室長)

(主な発言)

<NHKキャンペーン「災害列島 生きるスキル」

「巨大地震 あなたの町の“地域リスク”」

(総合 12月6日(金) 後7:30~8:42) について>

- 全国のさまざまな災害情報を伝えていて、とても勉強になる番組だった。番組の前半で「高齢者を見捨てない災害対策」を取り上げており、素晴らしいと思った。また、中学生の避難訓練を通じて、マニュアル通りにいかないことや、世代を超えた助け合いが重要だということを伝えていて、感銘を受けた。また、公的に指定された避難路だけでなく、市民で「マイ避難路」を作ることが大事だということも重要な情報だと感じた。すべての地域を一度に取り上げるのは難しいので、今回取り上げられなかった地域の課題に着目した番組も制作すると、いろいろな地域の参考になると思う。ま

た、海外の災害対策の事例や、日本で起きた災害の体験が海外でも生かせる事例などを通じて、国際的な視点から問題提起する番組も見てみたいと思った。ただ、ある出演者の紹介の際に出てきたイメージ写真の衣装が派手すぎると感じた。

- 生きている間に、南海トラフ巨大地震は起きると思っているが、CG映像やハザードマップを見て、一層現実味を感じた。地震は、自宅にいるときに起きるものだと漠然と思っていたが、自宅以外で起きたらどうしたらいいのかと思った。また、実験で見たように、夜中に寝ているときに地震が起きたら、立ち上がれず、逃げられない状況であることがわかった。津波のリスクのある沿岸地域の避難対策では、地域住民が高齢者を助けようと取り組む中で、高齢者に「まずは玄関まで出てきてください」と呼びかける様子を見て、顔が見える地域だからできることだと感心した。一方、都会では地下鉄の避難訓練の映像もあったが、乗客がいないときの訓練なので、ラッシュ時ならひどいパニックになるだろうと思った。地下街では水が流れ込んできて割れたガラスが流れてくる危険や、地上では看板が落ちてくる危険があることもわかった。一方で、助かるための具体策として「東西南北は把握しておくこと」を紹介していたが、災害時に実際にできるだろうかと思った。具体的にできることがあればもっと教えてほしいし、不安だけが残る形になった。また、SNSで寄せられた視聴者の意見の表示の切り替えが速く、読みにくかった。生放送の時間内で、疑問に答える時間があまりなかったので、最後に寄せられた疑問を一覧にして、専門家が答えていく時間があればよかったと思う。また、アナウンサーが終始笑っているように見える印象だったが、ゲストが深刻な表情だったので、対照的に感じた。
- 25年前の阪神・淡路大震災で被災した経験があるので、真剣に番組を見た。ふだんから備えをしておく必要性は感じているものの、2度と同じような経験をしたくないという思いがあり、南海トラフ巨大地震の危険性を見聞きしても、目を背けたくなるところもある。私と同じような思いの人はたくさんいると思うので、そうした人たちの心の扉を開ける重要な役割をNHKに担ってほしいと感じた。番組では、津波、液状化、水没など災害のいろいろなパターンを説明していたので、職場でチームを作って対策する必要性を感じた。いろいろな地域で想定される被害のリスクごとに対応する知恵が盛り込まれていて興味深いと思った。また、この番組には充実したウェブサイトもあったが、災害の体験から来る知恵やノウハウがたくさんあると思うので、想定されるリスクに対応する仕組みやノウハウをうまく蓄積していければいいと思った。NHKのインターネットサービスが、蓄積されてきた膨大な映像や知見を広く長く、伝えていけるきっかけになればと思った。

- 核心を突いた番組だが、最悪の事態を想定してあおっているようにも感じられて、客観的に見られなかった。番組では、南海トラフ巨大地震によって巨大な津波が発生した場合を想定して、地域のさまざまな取り組みを紹介していたが、34メートルの津波がどんなものなのか、建造されている津波避難タワーや津波避難ビルで持ちこたえられるのだろうかと思った。津波が到達するまでに1時間以上の時間がある大都市でのリスクと、取り組みと課題についても紹介されていたが、ふだんから大阪駅周辺の地下街や地下鉄を利用する私には、地震発生直後の避難行動はかなり参考になった。発災直後はすべての通信手段が途絶してしまうかもしれないが、可能な限り情報を得て、次の行動につなげていく必要があると感じた。また、液状化については、大阪市内も広範囲に発生するという地図に驚いた。これに対し、ゲストの「正直もう一つピンと来ていない」というコメントは、大半の視聴者の感想だと思った。大阪府や大阪市の公式サイトを調べても、番組と同様に大阪市内が広範囲に赤く塗られた地図が掲載されているだけで、説明も対策もないので、不安を感じた。近年、地球温暖化によると思われるこれまでに経験したことない台風や豪雨、特に線状降水帯によってもたらされる集中豪雨による川の氾濫による浸水被害が全国各地で起きているが、大阪市内の淀川沿いで生活する人が最も警戒しているのは淀川の堤防の決壊による浸水被害だ。実際に発生した場合を具体的に想定し、啓発する番組を制作してほしいと思う。

- いつか来る大地震に備える意識づけや、地震に対するいろいろな取り組みを知ることができる、よい番組だった。大きく3点に絞ってまとめていたので、シンプルで分かりやすかった。特によかったのが問題提起や危険回避の努力が全て事例や実践例で見られたことで、自分の地域に当てはめて考えることができた。避難場所はふだんから認識していても、避難経路の状況までは想像できないので、番組を見て改めて自宅の周辺の道路の状況を考えるようになった。また、名古屋大学減災連携研究センター長の福和伸夫さんは、折に触れて展望ある形で何をしていけばいいかをコメントしていてとてもよかった。番組の演出については、生命に関わる危険や死に直結するような問題は、赤字でテロップを出していたので、視聴者への注意喚起になったと思う。また、会話の部分の小さい文字も非常に読みやすかった。一方で気になったのは、スタジオのシーンで、常にSNSで寄せられた視聴者の意見を出していることで、話に集中したいときに集中できないと感じた。ニュース番組や啓発番組で、視聴者の意見や感想を常時流す必要はあるのだろうか。視聴者の意見は数点紹介されるだけなので、最後にまとめて見せてもらったほうが共感しやすいと思う。ゲストの顔を時折ワイプで映す演出も必要だろうかと感じた。

- 番組の冒頭から驚きの数字が流れていたのので、引き込まれた。私の所属する自治会は防災に関して積極的なコミュニティで、常に安全に避難できるよう意識付けしているが、それでも、それ以上のことを想定しないといけないと感じさせられた。巨大地震はもうこないと思っていたが、冒頭の10分間を見ただけで意識が変わり、いつ来てもおかしくない状況だと感じて、いろいろと考えさせられた。各自治体の取り組みもたくさん紹介していたが、番組でいちばん印象的だったのは、高知県黒潮町の職員が高齢者にこまやかに呼び掛けをしていて、「みんなで生き延びよう」という思いが映像から伝わってきた。いろいろな対策の中で、SNSでの対策など新鮮な情報も知ることができたが、それ以上に人と人の支え合いはとても大事だと思った。実際に巨大地震が起きたときに、知識は全て生かせるわけではないが、紹介された取り組みは、とても参考になった。私も液状化のことがまったくわからなかったが、ゲストが、一般の視聴者の目線でコメントしていたので、とても見やすいと感じた。

- CGを使ったリアルな映像にとってもインパクトがあった。巨大地震は日常的に考えておかなければならない問題だと訴えかけていて、挑戦的な番組だったと思う。番組で紹介された、高齢者や障害者を救済する取り組みや「マイ避難路」、特に保管ロッカーはとても参考になった。この番組を作るにあたって、NHK内でもさまざまな議論があったことだと思うが、番組でCGによるリアルな映像やハザードマップを出したことはよかったと思う。データで死者想定数が出ていたが、データの入手先と算定方法を知りたい。また、また兵庫県出身のゲストが出演していたが、阪神・淡路大震災の経験を話すこともなかったので、出演してもらった意図を知りたいと思った。警鐘を鳴らすという意味で立派な番組だったが、実際に私たちはどのように具体的な行動につなげていけばいいのだろうか。携帯電話やタブレット端末など情報手段が利用できなかったときの課題などもあると思うので、次はどのような番組に展開していくのか、知りたいと感じた。

- 25年前の阪神・淡路大震災を経験したことで、前回よりは適切に対応できるように思うが、次はどのような事態が起きるかわからないので、起きたことに対してよりよい判断をしていくしかないと思う。沿岸部の人たちの避難対策では、まずは避難して、落ち着いてから家族の安否を確認するというところで、阪神・淡路大震災、東日本大震災を経て、減災の視点が強くなっていると感じた。また、現在、高齢化が進む中で、破局的な状況で地域の絆をどう生かすかは大きな課題だと感じた。番組に登場した高知県の津波避難タワーを見たことがあるが、34メートルの津波が来たら、本当に機能するのだろうか。また、都市部の津波の課題には、東日本大震災で起きた津波火災もあると思う。大阪などではかなり被害が大きくなるのではないかと。さらに25年前

は、通信手段として携帯電話はほとんど通じず、公衆電話が機能していたが、現在は公衆電話の数が減ってきている。都市部で安否確認のための対策として、通信会社や国がどのような準備をしているのかを知りたいと思った。

(NHK側)

この番組は、12月1日(日)から8日(日)の「体感 首都直下地震ウイーク」で放送した関連番組の一つだが、首都直下地震同様、発生が懸念されている南海トラフ巨大地震を題材にして制作したものだ。幅広い地域をなるべく対象にしようということで、今回7つの府県で取材を行い、70分あまりの番組にした。「最悪の事態を想定してリスクをあおっているように見るのがつらい」という指摘もあったが、災害報道に全力で取り組んでいても、災害による犠牲者が後を絶たない状況で、災害報道担当チームとしては「災害を自分のこととして考えてもらうステージにきているのではないか」と考えている。あおりすぎるのはもちろんよくないが、自分の住む「地域リスク」をうまく伝えることが最大の目的だ。阪神・淡路大震災25年は大きな節目だが、記憶の風化が進んでいる現実があるので、経験した方には改めて思い返してもらい、激甚化が進む災害に備えるきっかけにしてもらおうと、1月17日(金)に向けて、さまざまな番組やインターネットを活用してキャンペーンを行っている。阪神・淡路大震災は、都市型の直下地震としては、日本で初めて被害を詳細に映像で捉えており、当時の映像をいろいろな番組で流している。「ニュースほっと関西」の最後のコーナーでは当時の映像を流しており、胸を突くような衝撃的な映像も盛り込まれている。頂いた意見や課題もふまえて、引き続き防災、減災に取り組む番組を制作していきたい。

(NHK側)

番組制作にあたって議論する中、「津波がどのように来るのかがわからない」、「津波避難ビルや避難タワーはどんなものかイメージが湧かない」などの意見も出たので、そうした意見を大事にした。また、どのような被害が出るのかを伝えるだけでなく、具体的な対策もできる限り伝えた。また、防災対策は、「公助」だけでは成り立たなくなってきており、自分たちで備えることも大事なので、参考となる情報やデータをわかりやすく伝えるよう心がけた。想定

死者数などの基本的な数字は、内閣府が東日本大震災の翌年（2012年8月）に取りまとめた第一次報告に基づいている。その中では、南海トラフ巨大地震のうち東海地域で揺れが大きくなるケースを詳しく論じていて、238万棟余りの建物が全壊・焼失。関東から九州までの13都県100市町村で10メートル以上の津波、静岡県から高知県などを中心に10県151市町村で震度7の非常に激しい揺れが想定されている。また、内閣府の被害想定後、各都道府県では独自の想定を定めるよう求められ、大阪府は水門が機能しなくなることを考慮して、最悪の場合、大阪市だけでも津波で12万人が亡くなるという想定をし、対策を行っている。番組では、「内閣府想定」や「大阪府想定」など、字幕スーパーやコメントで明示した。また、3つのテーマのうち、液状化の問題は難しい内容なので、あらためて番組を制作したいと考えている。そのほか淀川の氾濫や、都市の津波火災、通信の問題についても、引き続き伝えていきたい。番組冒頭でも少し触れたが、ゲストの1人は「NHKスペシャル シリーズ 体感 首都直下地震」のドラマ「パラレル東京」で行方不明になるキャストを演じており、指摘のあった「派手な衣装の写真」は、ドラマの中で使用されていたものだ。ゲスト自身も阪神・淡路大震災を経験しており、番組内でその時の経験をもう少し話してもらえば、この番組に出演してもらった意図がより伝わったと思う。

（NHK側）

防災の番組はいろいろな形で引き続き放送するが、データも更新されていき、新しい話も知見も積み重なってくるので、随時取り上げていきたい。阪神・淡路大震災から25年、東日本大震災から10年などの節目となる年にはいろいろな形で全国に向けて発信し、地域ならではの問題意識も持ちながら番組を制作していきたい。

- 12月1日(日)～8日(日)の8日連続の「体感首都直下地震ウィーク」という発想に本当に驚いた。周りの子育て世代もほとんど見ていて、SNSでの発信もとても多く、これほど引き込まれた「番組」は今までなかったので、NHKでしかできないことで、本気が伝わってきた。衝撃的な映像ばかりだったが、巨大地震が起こった際の「覚悟」と「準備」をしてもらうにはこれくらい必要だとわかった。ドラマ「パラレ

ル東京」は、被災状況が放送時間とシンクロし、SNSがリアルタイムに展開していた。大切な情報を見てもらうために娯楽は必要だと思うし、自分のこととして「家族で事前に話し合うこと」が当たり前のようにできた仕掛けが本当にすばらしかった。「巨大地震 あなたの町の“地域リスク”」に、ドラマ「パラレル東京」でキャスターを演じた俳優が出演していたことはよかった。ドラマと現実の区別なく、よりリアリティをもって番組を見ることができた。一方で、男性アナウンサーが笑顔の場面が多いわりに、ゲストの表情がいつも困ったような感じが少し気になった。また、一つ一つの地域のリスクを津波、人口密集、液状化、夜間と分けて、CGを駆使し、実際に備えるための防災活動をしている自治体の事例を紹介し、災害列島にっぽんに住んでいる実感と、自分の地域では何に備えなければいけないのかを考える時間となった。高齢者の「避難をあきらめない」、「生きることをあきらめない」取り組みの数々は、見ていて涙が止まらなかったし、「生きることをあきらめない」強いメッセージが受け取れた。「どうせ無理」や、「避難ルートが悪い」と行政のせいにせずに自分には何ができるかと自分の頭で考えて1つ1つできることを行っていく。人が生きる過程で降りかかってくる壁を乗り越える考え方そのものだった。巨大地震は怖いですが、私たちがこの日本で本当に命を守れたら全世界の人々に生きる希望と、あきらめない大切さ、人間のすばらしさを伝えることができると思い、できることからしていこうと明るい気持ちにもなれた。

- CGなどが多用され緊迫感があった。自然の前での人間の卑小さを思うばかりだ。ただ、そのことを自覚し、一人でも多くの命を救わなければならないと奮闘する人たちをテレビが取り上げたことに感激した。高知県黒潮町では最大34メートルの津波が予想されているので、南三陸町の防災センターの惨状を思うと、現状の態勢で大丈夫なのかと不安になった。また、大川小学校の例にもあるように、川を遡上する津波によって、内陸部でも大きな被害が出るので、海と離れているからと安心している人たちにも注意を喚起する必要があると思う。支流の入り口には水門がある場合があるが、閉めるのは電動だろうか、手動だろうか。地震によりゆがんで動かせなくなるのではないだろうか。地下鉄の中で地震に遭わないことを祈るばかりだ。

<放送番組一般について>

- 12月15日(日)の「陶器に恋するしがらき焼き物紀行」(総合 前 7:45~8:24 近畿ブロック)を見た。とても温かい番組でおもしろかった。これまで信楽に行ったことがなく、「信楽焼といえばたぬきの置物」のイメージくらいしかなかったのが、作品も

幅広くすてきだと思った。次々と出会う陶芸家はすべて温かく、旅する気分させてもらえる番組だった。旅をする桜庭ななみさんは飾らない人柄で、陶芸を体験しているときも、コップ選びで迷っているときも、一緒に楽しめた。信楽焼の魅力は、長い歴史だけではなく土にもあり、小物から大物まで作られていることも紹介していたので、誰かに伝えたくなった。SNSで注目を集めている、若手作家である藤原純さんの作品は初めて知ったが、信楽焼の素朴さに派手なブルーが入ってきて、すてきだと思った。これまで陶器は安価なものを求めてきたが、焼き物がおいしさを演出すると感じたので、信楽焼のカップでコーヒーを飲みたいと思った。ただ、現地の方を紹介するときに、合わせて表示された連続ドラマ小説「スカーレット」の好きな役名のテロップがやや見にくかった。

- 桜庭さんが信楽焼を紹介する「女子旅番組」で、初心者でも気楽に見られる楽しい番組だった。信楽はほとんど回ったことはないが、桜庭さんと一緒に町を歩けた感じがしてよかった。特に印象に残ったのは、火入れしたら4日間窯に張りついている窯元だ。窯の口を開けるととても熱いことや、薪の窯でないに出ないひ色の風合いにはとても感動した。また、桜庭さんは、窯元の陶芸家との会話も自然で、どのカップを買うか悩むところに共感した。また、窯元に比べると訪ねやすい、信楽に住む女性陶芸家による陶器のマーケットを紹介するのはよかったが、その歴史や、何人ぐらいの女性陶芸家が出展しているかなど、客観的な紹介がもう少しあってもよかったと思う。さらに、滋賀県立陶芸の森の陶芸館の場面で、信楽焼のことをもう少し詳しく知りたいと思った。番組では、4つの目標をクリアしながら信楽焼を紹介していたが、ゆっくりと訪ねた感じも出ていて、日曜日の番組としてよかった。日曜にゆっくり過ごしたい人にとっては、朝の7時45分からよりも、もう少し後の時間帯でもよかったと思う。
- 「スカーレット」の舞台の信楽を、主人公の妹を演じる桜庭さんが訪れ、現在の信楽焼の魅力に迫る番組だった。信楽焼といえばたぬきの置物が有名だが、実際に行ったことはなかったので、桜庭さんと初めて信楽を訪れる感覚で番組を見た。この番組を見るまでは、漠然と陶磁器というものがあって、陶器も磁器も同じようなものだと思っていたが、陶器は平安時代や鎌倉時代から続いているものであることを知った。40分の番組にしてはかなり盛りだくさんの内容で、信楽の魅力を少しでも多く伝えたいという制作者の熱意が伝わってきた。信楽焼は鎌倉以来の長い歴史があるが、あまり伝統的という印象はなく、各窯元もそれぞれ独自の特色を出しているという印象だった。だからたぬきの置物も生まれ、信楽の名物にまでなっているのだろうとも思った。

- 楽しい番組だった。子どものころから焼き物に興味があるので、信楽に行ってみたくてと思った。桜庭さんがいろいろな場所を巡る様子を見て、自分が行ったような気持ちで追体験できた。一方で、外国産の焼き物が入ってくることで、日本の産地の衰退は深刻化している。若者も含め日本人は、相対的にもものに関心を持たなくなってきたが、産地を訪ねる体験型の消費は有力なコンテンツになると思う。NHKの番組で全国のいろいろな産地の焼き物を紹介すれば、もう一度目が向くだろうし、人気が再燃すれば外国の人にも訴求するのではないか。桜庭さんは「スカーレット」でしか見たことがなかったが、役とは全然違う雰囲気ですてきだと思った。
- 「信楽焼といえばたぬきとひ色の焼き物」という固定観念があったが、今回のこの番組を見て、さまざまな種類があることがよくわかった。特にきれいなブルーの皿は、信楽焼だと説明されなければ全然わからなかったと思う。同じように、昔からの信楽焼しか知らないという人は多いと思うので、さまざまな種類があることを紹介したのはよかったと思う。特にお茶会をするという目的を持って窯元を巡っていくので、いろいろな窯元が見られてとてもよかった。旅をする桜庭さんは、素直な印象でとてもよく、姉役の戸田恵梨香さんのために作った湯飲みの出来栄えにも感心した。今度こそ信楽を訪ねてみようと思った。
- 信楽焼といえばたぬきの置物というステレオタイプを超えた信楽焼の可能性、多様性が伝わってくる番組で、とても勉強になった。また、桜庭さんの雰囲気もとてもよく、ほのぼのとした、上品な形にまとめられていたと思う。ただ、番組の最後のほうで、桜庭さんのコメントをテロップで「私が作ったやつ」とそのまま紹介していたが、文字情報としては「私が作ったもの」としたほうが日本語としてはきれいではないかと思った。また、信楽というと鉄道の事故を思い出してしまうが、30年近い月日が経過し、事故の悲しいイメージが払拭（ふっしょく）され、活気のあるすてきな町になったことに安心する一方で、事故をとりまく現状がどうなっているのかが気になった。
- 信楽を小旅行したような気分になれる、大変爽やかな番組だった。特に信楽焼の名工ではなく、比較的若い作家が紹介されていて、興味深く感じた。桜庭さんはとてもすてきな人だと思ったが、だんだんと主人公が焼き物から桜庭さんに移ってくるような気がした。最初の駅で大きなたぬきに出会うあたりのシーンでは信楽焼が主人公だったと思ったが、手びねりの体験をする場面では桜庭さんが主人公のようになってきた。番組のタイトルに「しがらき焼き物紀行」と入っていたので、もう少し信楽焼の

歴史や伝統も含めた陶器を中心にした紹介だと思っていた。それならむしろ「桜庭ななみと行くしがらき焼き物紀行」というタイトルであれば、違和感なく見られたと思う。また、信楽の自然の紹介などもあればよかったのではないか。

- 全体として楽しい番組で、桜庭さんが10分間考えて一つのカップを選ぶ様子はけなげで、自分が信楽を訪れた思い出と重ね合わせて見ることができた。一方で、信楽は伊賀や美濃と近く、割と似た傾向の作品もあるが、鎌倉時代以降の信楽焼の歴史を、1、2分程度で紹介するとわかりやすかったと思う。「信楽焼といえばたぬきの置物」というステレオタイプなイメージがなぜ生まれたのかということも含めて、古今の差がわかったように思う。また、単に陶器を売るだけではなく、どう使うかという消費のスタイルを提案するなど、焼き物の産地が徐々に変化する様子も紹介していて、とてもよかったと思う。また、薪で焼き上げる窯も紹介していたが、火入れの前には神事を行うなど、火を特別視する日本人の心性が今も生きていることがよくわかった。桜庭さんのキャラクターによるものかもしれないが、機会があれば行ってみたいと思える明るい番組だった。

(NHK側)

2019年4月以降「おうみ発630」の中で放送している「しがらき焼きもの紀行」という7分程度のコーナーでは、信楽のさまざまな陶芸家を紹介している。「スカーレット」の舞台が信楽に決まり、地域に活気をもたらしたいという思いもあったので、地元の放送局として、応援になるような番組ができないかと議論をし、焼き物だけでなく人の魅力も含めて、信楽を紹介することにした。「信楽といえばたぬきの置物」のイメージが強いが、伝統的な手法を守る作家から信楽の土にほれて移住した若い作家までいろいろと話を聞くと、多様性のある土地柄だと改めて感じたので、その点が番組でうまく伝えられればと思った。今回の番組はその集大成だが、日曜日の朝の放送で、若い人や家族にも気軽に見られるよう、桜庭さんを旅人にして、信楽の魅力に触れてもらいたいと思った。また、伝統工芸はメディアで紹介しないと、魅力が伝わらなかつたり衰退したりすることもある一方で、若い世代は興味を持ってこうした世界に入っていきたいという人も多いと聞く。伝統工芸の継承にもつながればと考えている。

(NHK側)

「ゆったりと楽しめた」という意見をいただけて本当によかった。この番組は、ディレクターが、旅をする桜庭さんと同じ目線で制作した。桜庭さんのコメントの「私が作ったやつ」というテロップについては、ことばを補うかどうか悩んだ結果、今回はそのままの表現を大事にした。また、『好きな役』のテロップが見にくい」という指摘については、ディレクターがオリジナルで作成した書体を使ったところ、テロップが見にくくなってしまった。同世代の女性が信楽に行きたくなる演出として細部にこだわった結果だが、今後の参考としたい。地域放送局にとって、地元の産業の衰退は大きな課題だ。信楽には「スカーレット」で描かれる古き良きノスタルジックなイメージもあるが、信楽の方々はこれからのことを真剣に考えている。新たな信楽の創意工夫を番組に入れて、番組を見た方が訪れるきっかけになればと考えた。信楽焼の歴史ももう少し紹介したかったが、番組の構成上、今回は割愛した。月1回放送する「しがらき焼き物紀行」で、焼き物の伝統工芸としての側面をしっかりと伝えているので、今回は親しみやすさを意識した。また、滋賀県には伝統工芸の産地がたくさんあるので、今後も機会をとらえて、親しみある形で伝えていきたい。

- 40分とは思えない情報量と、若い女性にピッタリはまる内容で、とてもよかったと思う。ハッシュタグを用いた紹介もよく、信楽の今の魅力を全国に伝えられてうれしかった。10年前の冬に一度、家族で訪れたときに本当に寒く寂しい町だと感じたが、「スカーレット」のおかげで町に元気が戻ってきていると聞く。番組冒頭のラッピング電車には、車内には戸田さんのサインのほか、至る所に焼き物のイラストが描いてあると聞くので、車内の内装ももう少し見たかった。番組タイトルとネズミの置物はあまりにすてきで、「信楽焼といえばたぬきの置物」と思っていた私は、目を奪われた。卯山窯のねずみが、最後にまた出てきたのがよかった。陶芸家の小西啓吾さんの茶こしと器が一体となった急須は、型を使わずろくろ一つで生み出す職人技に本当に驚き、作っている場面を興味深く見た。付け爪の話もよかったが、茶こしの部分を作る手元をもっと見たかったと思う。一方、10円玉ほどの小さな花瓶を作る過程は全部見せてもらったので少し満足した。番組で出た紅茶は信楽の和紅茶だったのだろうか。朝宮茶だったら地元の人にはさらにうれしいと思う。信楽焼とひとまとめではなく、小物や細かい細工が特徴的なものや、転職して陶芸家になった女性陶芸家の福井亜紀さん、手びねりの若い作家の藤原さん、信楽焼のアップルパイ、光が透ける新世代の信楽焼など、さまざまな信楽焼を紹介した後、最後に伝統的な穴窯が紹介され

た。年に数回しかない火入れの儀式的紹介まであって、すばらしい構成だと思った。

- それぞれユニークな作品作りをしている作家たちが登場したので、興味深かった。信楽には、世界の名画を陶板に焼き付ける技術を持つ工場もあるので、取り上げてほしいと思った。

- 年末は「NHK紅白歌合戦」から「ゆく年くる年」に切り替わる瞬間がとても好きで、昔からいつもその時間は必ずNHKを見ている。12月31日(火)の「ゆく年くる年」(総合後 11:45～1日(水)前 0:15)を見た。番組の冒頭で薬師寺の東塔が映し出された。12月中旬にはシートがかかっていた東塔が格好よくそびえ立っていて、非常に感銘を受けた。「ゆく年くる年」へと移り変わる瞬間は、新しい年を迎えて旧年を送るという日本的な情緒があるので、これからも文化を守るという意味で続けてほしい番組だ。

NHK大阪拠点放送局
番組審議会事務局